



書名：21世紀のインド人 - カーストvs世界経済  
著者：山田和  
発行：平凡社  
価格：1,995円(税込み)

#### ◆内容

決して批判めいて言うわけではないが、今までの日本のインド情報はインドの「負」を隠すことを礼儀とするところがあった。北朝鮮問題、中国問題でもそうだが、日本政府や日本人はとかく相手国の心証を害さないように心配りをする。それが問題の抜本的解決を遅らせることに気づかない。ビジネス上最大のネックになっているカーストの問題、労働の質の低さ、進まぬインフラ、出自自慢とポジション崇拜、排他的な一族郎党主義と帰属コミュニティへの過度な優先主義、上から下までの賄賂まみれ、その場しのぎの無責任、利益や保身のためにためらいなく行われる文書改竄、前近代的なファミリー会社体質など、日本人は相手国に対するこのような「負」の情報の蓄積と分析を拒み、その結果、後に続く邦人、日本企業にいつまでも同じ「負」を体験させてきた。インドで苦勞し「負」の実像を知った者こそがインドと真に付き合うことができることは自明のことであるのに、インドを知る多くの者は魅力の部分しか語らず「負」の情報を排除してきたのである。

本書は、この「負」への理解こそが、これからのインドビジネスに欠かせないものととらえ、今まで伝えられなかった驚天動地のインド人ビジネスマン感覚など、インドの「負」の衝撃的な実態を紹介しつつ、「負」は結局「異文化」であることを知ることが重要であり、これを理解することによって新しい日印ビジネスの未来と可能性が生まれると主張する。

#### ◆目次紹介

プロローグ あなたには好き嫌いがいいんですか

第1章 インド人のビジネス感覚 (儲けとは汚い言葉ではない)

第3章 日本とインドの経済摩擦 (ビジネスパートナーへの遠い道のり)

第5章 インド人の金銭感覚 (吝嗇とノブリス・オブリージ)

第7章 インド人にとってのグローバリズム (夢をもてる者ともてない者への分裂)

付録 この目で見た経済改革11年目のインド (「旅日記」から)

第2章 リベートの風土 (コミッション感覚は民族的遺伝子か)

第4章 インド駐在員の日常 (インド人社員、使用人とどうつき合うか)

第6章 経済改革は何をもたらしたのか (「プログラマー」に憧れる子どもたち)

